

意外に多い耳の病気《Ⅰ》

大人がかかる耳の病気は意外とたくさんあり、しかも、ひとたびかかったら、急いで治療しないと一生聴力を失ってしまうような恐ろしいものもあるのです。初期段階で起こる症状や、治療時の注意点を知り、いざかかってしまったときのために備えておきましょう。

◎難聴は様々な病気のサイン

難聴というまったく聞こえない状態をイメージする人が多いのですが、ちょっと聞こえにくいという程度でも難聴だということです。

また、耳鳴りは難聴とは別物と考えている人が多いですが、耳鳴りも難聴が引き起こす症状の一つです。同様に、飛行機に乗ったときに感じるような耳が詰まった感じを、専門用語で「耳閉感」といいますが、これも難聴の一つです。**聞こえにくさ、耳鳴り、耳閉感はいずれも難聴の症状**であると覚えておいてください。

◎最多かつ要注意「突発性難聴」

大人がかかる耳の病気のなかで最も多く、注意を要するのが「突発性難聴」です。ある日突然、片耳に難聴の症状が起こり、場合によっては、めまいを伴います。

難聴やめまいが現れたら、**できるだけ1週間以内、遅くとも2週間以内に耳鼻科を受診してください。**

※早く受診しなければいけないかという、音を感じる神経である「有毛細胞」が障害を受けた場合、10日から2週間の間に神経変性が起こってしまうからです。神経変性は一度起こると元に戻らず、聴力も戻りません。

早期にきちんとステロイド薬などを内服または点滴すれば、基本的に1～2週間で治ります。原因ははっきりわかっていませんが、ストレスや疲労などが引き金になるとされています。

また、めまいが起こった場合、多くの人は脳神経外科や内科を受診しがちです。

ところが、めまいの原因の7割は耳からくるものであり、脳や血圧、内臓からくるものは全部で3割程度。脳神経外科や内科では、当然ながら耳の病気の診断はできないため、突発性難聴のように急を要する病気であったとしても、診断や治療が遅れてしまうケースが多々見られます。めまいを起こしたら、まずは耳鼻科を受診してください。



耳がふさがった感じがする

◎加齢による難聴も放置は禁物

病気ではありませんが、加齢にともなって難聴が進むのが「加齢性難聴」です。

しかし、かなり個人差が大きく、90歳でもまったく難聴がない人もいれば、30代後半から起こる人も。耳鳴り、耳閉感を訴える人が多いですが、特徴は、基本的に両耳に起こるということです。

「歳だから」とあきらめて放置すると、認知症などを併発しやすくなるおそれも。

早めに耳鼻科を受診し、必要に応じて補聴器などの使用を検討することをオススメします。



◎ヘッドホンで「音響外傷」に

騒音など、外からの音の影響で引き起こされるものに「音響外傷」があり、大きく「急性音響外傷」と「慢性音響外傷」に分かれます。

コンサートやクラブなどで大きな音を聞いたことで難聴の症状が出るのが、**急性音響外傷**。

突発性難聴と同じように神経の傷害なので、1週間以内、遅くとも2週間以内に治療することが大切です。

一方、いま急激に増えているのが、**ヘッドホンによる慢性音響外傷の「ヘッドホン難聴」**です。

毎日のようにヘッドホンやイヤホンで大きめの音を長時間聞くことで、徐々に聞こえにくくなるなどの症状が出てきます。スマホの普及で激増したといわれ、WHOも警鐘を鳴らしています。

慢性音響外傷は残念ながら治らないため、音楽を聞くときは音量や時間に注意してください。



※意外に多い耳の病気《Ⅱ》につづきます(来月号)

引用: <https://www.sawai.co.jp>

発行: ㈱シンケア 2019042